

スポーツ人類学専門領域

細谷洋子（四国大学）

1. あらまし

スポーツ科学と人類学の学際的研究領域を持つスポーツ人類学は、人類学の中でも特に文化人類学との結びつきが強く、1974年のアメリカの遊戯人類学会の設立によって独立した学問となった(ブランチャードとチェスカ, 1998)。スポーツ人類学の名称は1988年に出版された邦訳『スポーツ人類学入門』で原書タイトルの anthropology of sport がスポーツ人類学と翻訳されたことに由来する。その後、その名称は1988年に日本体育学会の専門分科会名となり、1998年には日本学術会議に登録する独立学会名へ、そして2009年には中国、韓国、台湾、日本の会員から成る国際学会(アジアスポーツ人類学会)名となり現在に至る^{注1)}(寒川, 2013:1)。スポーツ人類学の研究対象は、「文化の一構成要素としてのスポーツ」であり、「労働、遊戯、ゲーム、レクリエーション、儀礼、闘争」や「療養や癒し」の受身的余暇活動まで拡がりをもつ。これは「スポーツ」の語源であるラテン語の deportare が「気晴らしする、遊ぶ」を意味していることに起因する(寒川, 2004:2-3)。研究方法は、フィールドワーク等の文化人類学的手法や史資料ならびに一次資料研究が中心である。

2. 内外の研究動向

本領域においてエスニックスポーツや身体にかかわる活動を対象にした研究は、次のような問題系を有している。即ち、エスニックスポーツ・身体文化を文化変容、ナショナリズム、伝統の創造、観光化との関連において論じるようなものや、遊戯論、象徴論、エスニシティ論、文化化・社会化、機能構造論の立場からエスニックスポーツ・身体文化を理論的に考察するものである。更には、グラフノーテーションを用いた舞踊の動作分析やモーションキャプチャー等による身体技法の記録・分析も重要な課題である。スポーツ人類学では、スポーツ、舞踊、武道、養生法等を種々の文化要素の相互依存的複合体と捉え、それらを当該コミュニティの歴史的背景や文化文脈の中で読み解く姿勢が重要である。

過去10年の国内における研究には、中国少数民族運動会の研究、中国武術、バリ舞踊、タイ・マッサージ等の観光化を論じた研究、韓国武芸の創られた伝統を明らかにした研究、インドのカラリパヤット(格闘技)やエジプトのナブート(棒術)の身体技法を調査分析した研究、エチオピアやガーナ、或いはブラジルなどの民族/民俗舞踊研究、そしてブラジルのカポエイラやドイツの柔道を取り上げた武術研究がある。言うまでもなく、日本の柔道、合気道、仏舞、琉球舞踊、沖縄空手、阿波踊り、綱引きを対象とした研究も数多く存在する。

他方、国外においても何人かの人類学者がエスニックスポーツを対象とした優れた民族誌を書いている。例えば、Downey(2005)はニューヨークのカポエイラ・コミュニティを舞台に認知科学的視点から、学習論や実践論を展開した。また、Alter(1992)は解釈人類学的方法によって、インド人レスラーの身体と実践が伝統的なコスモロジーや規範を象徴し、再生産する様態を明らかにしている。

3. 科学的知見の応用の状況

調査研究によって蓄積された、諸民族・諸文化の身体理論モデルやエスニックスポーツの情報は様々な形で当該民族、当該社会へ還元される。例えば、エスニックスポーツの観光化についての調査研究結果は、当該地域の観光官庁等を通じて観光開発戦略に活用される。或いは、エスニックスポーツや武術、舞踊、養生法が伝える伝統的なトレーニング方法が、現在の競技スポーツのトレーニングに応用されている。例えば、日本の武術家や中国の僧侶、インドのヨーガ修行者が行ってきた瞑想法のスポーツ科学への応用は、その具体的な研究が着手されたところと言ってよい。スポーツ神経科学、スポーツ心理学との横断的な応用研究が今後必要である。そして、こうした知見は『体育学研究』や『スポーツ人類学研究』、並びに刊行された書籍等によって広く社会に発信されている。

4. 学校体育や大学体育に活かすべき最新知見

近年の学習指導要領で、スポーツが“文化”として捉えられていることを踏まえれば、中学校・高等学校において世界のエスニックスポーツが教材として用いられることは様々な意義をもつ。エスニックスポーツを構成する身体技法(身体の方法)は、当該地域の文化に色づけられている。エスニックスポーツを実践することは、身体を通じて体験的に異文化を理解することに寄与するだろう。

また、エスニックスポーツや武術、舞踊、養生法の基盤となる諸民族の身体理論モデルには、身体を健康に保つための様々な知恵が含まれている。これらは、近代体育理論を補完する形で、健康教育のより多様な発展を促すことを可能にするはずである。すでに大学体育においては、合気道、太極拳、ヨーガ、カラリパヤット、アフリカンダンス、カポエイラ等を教材にした実技授業が数多く行われている。

近年、加速化するグローバリゼーションを背景に、異文化理解や異文化間教育が重視されているが、エスニックスポーツを活用した授業はその要請に対して、体育がオリジナルなかたちで応答できる可能性を示しているのである。

5. 若手研究者へのメッセージ

21世紀に加速するグローバリゼーションは文化の均質化をもたらす一方で、文化の多様性を促進するような事象を巻き起こしている。また、“健康なカラダ”への欲求はますますスポーツに対する人びとの関心を高めている。こうした中、いかにスポーツや身体にかかわる活動が機能/変容しているのか、スポーツ科学と文化人類学の双方から生起する多様な課題の発掘と知見の提出が強く待たれる。

6. 引用文献

Alter, Joseph S. (1992) *The Wrestler's Body: Identity and Ideology in North India*. University of California Press.

Downey, Greg. (2005) *Learning Capoeira: Lessons In Cunning From An Afro-Brazilian Art*. Oxford University Press.

K.ブランチャード, A.チェスカ., 大林良太監訳, 寒川恒夫訳(1988)『スポーツ人類学入門』大修館書店。
寒川恒夫 (2004)『教養としてのスポーツ人類学』大修館書店。

寒川恒夫 (2013)『巻頭言・スポーツ人類学の現在』文化人類学研究, 第14巻, pp.1-5.

注1) ただし、現在の英訳は Sport anthropology であり、スポーツという語が先に記されている点に、スポーツ科学としてのアイデンティティが観取される(2013, 寒川)。(2014年8月30日執筆)